

口語詩句 4 月総評 龍 秀美 202304

<4 月総評>

しばしば真実はユーモアの中に隠れています。特に平時と違う事態が起きるとき笑いが真実を呼び出すのかも知れません。激しい速度で社会が変わっていく現在、ユーモアは真実を見極める私たちの大事な道具です。今月はそういう視点で選んでみました。

全員で音読しても国は国

---

合川秋穂 東京都

—個人を尊重するといっても、全員になると国になる不思議。何を「音読」しているのだろうか。なにやら不気味な雰囲気さえ伝わってくる。

市役所にバレないように踊り出す

---

合川秋穂 東京都

—集まって「踊る」という単純なことが規制される数年。そしてそれを「市役所」が取り締まるという滑稽な奇妙さ。

「親友」で片付く程度の友だった

---

浅葱 愛知県

—本当の友は一生に一人か二人あればよいとよく言われる。「親友」という言葉はひんぱんに使われほど軽くなっていく。

わたくしが木魚であれば埒は明く

---

松下 誠一 東京都

—叩かれるのが木魚の仕事。世間とは叩かれておくと大体うまくいくものらしい。そのう

え音高く、叩かれっぷりが良いと最高！

でたらめな文脈のあと

ぼくのこと抱きしめたでしょ

それが蝕です

---

からすまあ 神奈川県

—言葉より先に身体が動く。それが自然なふるまいのときもあり、相手を侵すことでもある。言葉のあずかり知らない領域。

それはとてもすてきな帯刀

パラソルを

小脇に抱え歩く砂浜

---

あお 奈良県

—武器は自分を守る道具でもあり、相手の存在を意識することでもある。パラソルはちょうどよい道具。

怖いゆめのなかで君に逢いました

ケーキを崩してからくれました

---

マズルカ 山口県

—これは怖い。なにが起こるのだろう。

花冷のとなりの見える小便器

---

にしざわゆうと 福井県

——ひっそりとどこにでもあり、つつましく、それでいて冷徹なほど完璧なかたちをしているあれ。花冷えにふさわしい発見。

なきごえを訳出しない人工知能

---

汐見りら 東京都

——今のところAIはなきごえを「訳出」して言葉にすることはできていない。「2001年宇宙の旅」のコンピューター「ハル」の最後の歌声はなきごえのようだったが。

対等の関係だけがいいなんて

嘘つかないで 夜はねむって

---

花やしき 東京都

——すべてが対等なんて、心休まらない非人間的な世界かも知れない。どんなにがんばっても人間は夜は眠らねばならないように。

次にこの

ヒヨコになれなかったやつを

フライパンに入れます

---

秦 大地 東京都

——こういわれると卵のなかにヒヨコのイリュージョンを見てしまう。言葉はマジック。

理由づけが先に来る歩みの遅さ

---

西尾日月 山口県

——結局、イヤなんだな。

犬が好き

生まれ変わるなら

電柱がいいと思うくらいには好き

---

橋口 諒介 東京都

—電柱に生まれ変わるという発想がスゴイ。